

「挫折のあとにできること」

ゲスト：足立元（視覚社会史・美術史）

足立 私は歴史として美術の枠を超えようとした人、絵筆を折ってしまった人に興味を持って調べているんですが、ここに生きている事例があるじゃないかと思いました。それほど奥さんは真剣に美術以外のことを考えている。1920年代のプロレタリア美術では、若者が本気で政治をやらなければ自分たちのやってきたことは嘘だという思いで絵筆を折っていった。今まさに筆を折らんとしている……本当に折るかはわかりませんが、その直前にいる彼に興味を持っています。

奥 イスラエルによるパレスチナ・ガザ地区虐殺が止まらないので、それに対して抵抗しています。8月から各地で展示をしていたんですけど、12月の京都の展示から帰ってきた作品の梱包を解かず、今回はほとんどそのまま展示しました。今年に入ってからは4時間くらいしか絵を描いていません。

足立 絵を描いているからこそパレスチナで起きていることに心を痛めて、描くことを犠牲にしてまでデモに参加している。そのことと、ここにある絵がどんなふうにかかわるのかを考えたい。パッと見は穏やかな、かわいらしい絵ですけど、筆遣いの揺らぎや葛藤のある複雑な絵だと思いました。

奥 パネルとキャンバスと紙を支持体にして、紙は主に水性絵具、パネルやキャンバスは油性絵具を使っています。油絵具は自分と相性が良く、決定をしないで描き進めることができます。たくさん絵をならべて、今日は青を塗ろうとか、赤を塗ろうとか、消したり描いたりを続けて。デモにも行くから、そもそも制作をあまりしないので、絵ができあがるのは数年かかる。その時間が物事を複雑にしている気がします。

足立 犬が描かれているからかわいとかじゃなく、絵筆の迷いや揺らぎに込められた想いがある。政治と芸術がどう繋がり得るか、絵画の技術やスタイルだけではなく、揺らぎに繋がる想いを聞かせていただけますか？

奥 大学では主に自分の家族の歴史と戦争とのかかわりを調べてインスタレーションをやっていたんです。そのとき1回挫折をしているんですね。曾祖父がパラオの南洋庁に勤めていたので調査に行って作品を発表したんですけど、数カ月だけ奨学金をもらって滞在して、自分が見たいものだけ見て帰って、作品と結びつけて発信することが、欺瞞だと感じた。そもそも日本が植民地にしていた歴史をずっと無視してきたのに、ちょっと調査して発表しましたとは言いたくなくて。それでインスタレーションをやめて、絵を描くようになった。

足立 大きな絵を描くのではなく、資料をならべて悲惨な歴史を考えさせるのでもなく、あえて小さな絵になっていくところが、美術の欺瞞を超えて行こうとしていると感じます。奥さんは、声と筆触を一致させる、と話していますが、それが作品を理解する上で重要ではないでしょうか。

奥 数年ぶりに絵を描きはじめてとき、色を塗っていてもその意味がわかって、筆に自分の気持ちが呼応するようになっていた。自分の絵肌と東京のアートマーケットで消費されている絵肌はかなり違うと。たとえばレイヤーがかっちりした絵肌が主流だけど、そういうものを批判したいので、レイヤーにならないような定着しない油を使ったり、湧きあがってくる感情を重ねていくように絵を作っている感じです。

足立 湧きあがってくる感情をどこで捉えるのでしょうか。

奥 僕は図書館員で、近所の公園で昼ご飯を食べるときに鳩が来たり、木がさわさわしたり、子どもが枝で地面をはいたり、光が降ってきたりするのがインスピレーションになる。難しい意味はなく、ずっと見ているもの。小さい頃入院しがちだったので、病院で窓の外を見るしかないときに学んできたものが多くて。光から感情が湧きあがってくる感じです。

足立 穏やかな絵と、街頭で一人デモをする行為がどうつながるのでしょうか。デモこそクリエイティブじゃないか、ともおっしゃっていましたがね。

奥 一人デモは無言で立っているんです。デモは死者を悼む行為でもあると思うので。大人数のときは連帯を表現するために大声でコールする。いま行動している人たちは心が柔軟だと思うんです。遠くで起きていることに傷ついて、皆でどうしたら良いか考えて。僕の絵も、心を柔軟にしたときに届くものだと思っていて。感情に浸透していくところがデモと絵は共通していると思います。

足立 絵は絵解きとして読まれることが多くて、昔はデモや労働者や犠牲者を描いて、それが政治的な表現だと考えられていた。でも、そうじゃないやり方を奥さんは考えて、私もびっくりした。小さい絵を描いたことも、デモあるいは人に声を届けようとするのと無縁ではないですよ。

奥 足立さんの『裏切られた美術』を読むと、1920年代には本当にたくさん労働者の絵が描かれている。それを公共の美術館で観る機会がなかなかないということがおかしいと思いました。カギ括弧つきの「多様性」とアートの親和性ばかり言われて、具体的に労働者を描いて訴えていた人たちはなかったことにされているんだなど。今のパレスチナの活動はいろんなアーティストもやっているの、昔との違いとか、何が一緒なのかを見ていく必要がある。当時はマップと言ったらしいんですけど絵葉書を作って配布したり、漫画のように複製できるものに移行していった。僕も全然絵を描いていないけれども、パレスチナに関するものをひたすら作り、道で配り続けているから、こういうことを知りたかったなど。

足立 小さい絵をマルシェで売ったことが転機になった。

奥 美術を観る人の階級の問題が気になっていて、美術館だけで展示をしても限られた人しか来ないから、来ない人がどう観るかわからない。マルシェに行ったら、心が清々になるくらい見事に売れなかったですね。マルシェで絵を売っている人の絵は売れるんですけど、僕の絵は売れなくて、世界の広さをまたひとつ知ったな、と。もちろんそれぞれの価値があるんだけど、僕はアートの世界も知ってほしいと思うから歩み寄るわけですよ。マルシェの主宰者から Google で猫の画像を見せられて、これ描いたらいいとか言われて。自分の絵を妥協していくプロセスでもあるんですけど、誰とどこまでの距離にいるのかは、やってみないとわからないから。美術館で展示するというキャリアを形成していくのは、本当に限られた見方でしかない。それが正しいわけでもないし、偉いわけでもない。ごく一部の人たちの関心を集めたものでしかなくて、本当はもっと広いんですよ。西洋と日本の縮図の中で、パラオや中東が忘れ去られているのと同じ。もっと画家はどこにでも行かなきゃいけないと思いますね。

足立 ギャラリーや美術館を出て、ストリートに行くんですね。ストリートから美術館に行くアーティストはいますけど、逆にストリートで揉まれる。でも全然売れないわけではないですよ。結構、安く売っていますよね。

奥 前はギャラリーに勤めていたの、現代アートの価格は知っているんですけど、めっちゃバイトがばっけて貯めたら買える、というところに設定しておきたい。そういう絵を少しでも作っておきたいという気持ちはあります。僕の絵を買った人は、初めて絵を買ったという人が多いんです。例えばコレクターに買われて倉庫の中に眠ったまま出てこないという絵があることを、働きながら経験してきたので、誰かに買われて大切にされた方がいい。誰と信頼を築きたいかというところが値段とかかわっているのかなという気がします。

足立 個人の住宅に飾れる絵でもありますよね。本棚の間にぽつと置かれているのを見たことがあるんですけど、家に絵が侵入あるいは介入していくことと、声とかデモで介入してかわかっていこうとするこの関係を聞かせてください。

奥 僕は Homemaking という展覧会を企画しているんですけど、Homeという言葉が大事だと思っていて。僕の絵は一点しかないの、所有しようと思った人は、他と比べるのではなく、自分で価値を定めなきゃいけない。そういう行為がアイデンティティにとって大事で、絵を家に所有していれば、たびた

び買った頃のことを思い出して、自分とは何者かわかっていくんですよ。その感覚をもってすれば、誰の土地やアイデンティティが奪われているのかという関心につながっていく。足立 社会を動かそうとすることと、個人の人生にかかわろうとすることが、重なっていきますね。

奥 今、SNS で、毎日パレスチナで人が殺されていく情報に触れて、それが止まらないから、殺すのをやめてくれと言わざるを得ない切実さがある。かつて、皆が同じテゼしか言わなくなった気持ちがよくわかるんですよ。でも同時にアーティストであるから、個人の物語を言わなきゃいけないと思うし、そこは揺れがある。

足立 絵を描いているからこそ、本気でパレスチナに心を動かされる。絵描きであることを賭けて政治にかかわらないと本気になりえない、そのヒリヒリしたところを含めて奥さんの絵をあらためて観ると、ただ穏やかなだけではない深みがわかる気がします。それから、誰かが誰かの世話をするケアについても絵を通じて考えていますね。

奥 自分にとって絵具は小さいときから親しみのあるもので、自己と他者が交わる感じなんです。絵から返ってくるリアクションと会話している認識で絵を描いている。久々に描いたときに、絵を描くことは言葉にならないことを表現するものだし、人の心を癒やすには充分なものだと思って、3~4年前にケアのことを考えはじめたんです。アーティストがアーティストの日常のケアの話をしていくことも大事ですけど、造形的な部分でケアの話ができないかなと思って。それから美術界のジェンダーバランスやキャリア形成も含めて、ケアをさせられる属性の人がキャリアから外れていくことがあるので、たとえばケアワーカーの賃金の引き上げを要求するか、自分にできることはあるのかなと気にしています。

足立 展覧会のタイトルに「ドゥーリア」という言葉がある。

奥 「ドゥーリア」は、哲学者のエヴァ・フェダー・キティの言葉で、ケアする人をケアする社会の在り方を提言するための概念なんです。ケアする人は労働市場において女性や移民に偏りがちで、社会が無関心で、その人たちの賃金や生活を置いてきぼりにするのは良くない。そういう人たちがさらに支えられたり、疲れたら交代できる環境だったり、ケアしている人の近くに、それをわかっている人が増えなくてはいけないと思って。当事者が声を上げることはリスクがあるので、まわりの人たちが声をあげる必要がある。「ドゥーリア」もそういう自分の立ち位置、アーティストとしてこういうことならできないのかという提言として使っています。

足立 それが舟という言葉に伴うのはどういう理由ですか。

奥 たゆたう、というか。自分の絵がにじみを多用していることもあります。あと、日本だけでなくいろんなところにケアが連環していくイメージは舟が良いかなと思っています。

足立 奥さんは「淡くてよんだ私の絵は何枚あってもはつきりしない」と書いています。波とか海のイメージにも重なるし、人間の原風景にアクセスするような絵だと思います。非常に政治的であると思うのですが、政治的という概念を何重にもアップデートさせるような試みの絵で、そういう意味で従来の美術から抜け出そうとしていると思います。

奥 足立さんの著書に、いわさきちひろが出てくるんですよ。いわさきちひろは好きな画家です。鉛筆の腹の部分まわすように描いているタッチがあって、本当に子どもが歩いていくイメージを鉛筆で描いているなど感動して。

足立 いわさきちひろは最初、前衛美術会にいた。彼女のイメージとズれるようですが、そこに丸木位里、丸木俊や山下菊二がいて。ちひろは暗くよんだ油絵を描いていたんです。でも彼女は前衛美術会をやめます。そして、その頃から童画家として快進撃がはじまっていく。前衛をやめるというのはどういうことか。そもそも前衛は芸術の否定です。芸術を否定するのが前衛なら、前衛をやめるということも当然ありえるんじゃないか。そして前衛をやめた人の童画は、ただ子ども向けの甘い絵に止まらなかった。実は彼女はずっと政治的

な意識を持ち続けていて、共産党員でもあったわけです。それが直接表現に結びつかなかったとしても、絵を観て考える中で、やわらかな絵の意味を感じとる。それと奥さんの絵と意識は、シンクロしているように私には見えます。

奥 いわさきちひろが丸木夫妻のデッサン会に出ていたことを知って、自分が絵を描き続けてもいいんだという勇気をもらえたんです。僕は大学時代に絵を描く同級生をバカにしていた、ヴェネツィア・ビエンナーレとかドクメンタに出たいと思って最新のアートを取り入れようがんばっていたんですけど、そのとき絵を描いていた人は、自分の感情と向き合うことを、制作を通してちゃんとやっていたんだろうと思う。でも絵だけを描いている人は評価されないんですよ。言葉でうまくコンセプトを話せる人が勝つ美術のシステムがあって。でも、リサーチの対象を搾取するようなことはもう嫌だと思って絵に戻ったときに、その気持ちを理解してくれたのは絵を描いている人だったんです。

足立 政治的なことに本気で向きあったら、アートをやっていることが欺瞞に見えてくる。そうした良心のうずきを無視していくのが今日の社会派アートかもしれません。でも奥さんはそこに背を向ける。歴史から考えると、世間から知られない、知る人ぞ知る絵かき……前衛美術会でいうと大塚睦という、かつてそこそこの名が知られていたけど、隠者のような絵かきになった人がいます。一方、うずきを抱えながらも政治的な意識を持ち続けた画家として山下菊二がいます。山下菊二はみずからをさらけ出して、傷つき、自分の肉体を犠牲にしながらかき続けました。彼らにとって大きな転機となったのが1960年の安保闘争だったと思われるんですけど、今日の話のテーマの「挫折」というのは安保闘争のあとに流行したんだと、竹中労が書いていました。その後にブレイクしたいわさきちひろ、隠者のように生きた大塚睦、美術界の異端児として存在し続けた山下菊二といった過去の例の中で、奥さんがどんな道に行くのかわからないけど、三者のどれでもないのだろうなという気もします。

奥 過去に自分より過激に行動していた人がいたことを知らなくてはいけないと思います。戦後、共産党員だった画家がたくさんいたことがタブー視されていることも良くない。僕にとってそのことに気づく入口が、いわさきちひろだった。逆に今、若い人が声をあげるときに、怒りを対象につけるだけではなくて、その場にいる人たちが全員安全な気持ちで怒れるか、ジェンダーもそうだし、障害のある方とか、声をあげるときにその声を聞きとれない人はどうするかとか、そういうことを気にして運動していることを、これまで運動されてきた人たちも学んでほしいと思います。

足立 倫理的な応答の手ごたえはありますか？

奥 日本の企業がイスラエルの武器を作っている企業と提携しているのをボイコットしたり、会社の前で抗議したりしてストップさせたことです。今は展覧会の巡回先のトークや駅前の人デモなど、仕事や家庭など人の人生で重要とされるような領域以外の場面で人と出会い、行動している感じです。

足立 絵からはじまって政治、そしてまた人と人とのかわりにつながっていく大事なお話で、私自身も、かつての芸術家たちもきっとこうだったんだという理解になりました。

奥 足立さんの本によると、プロレタリア美術が各地で展覧会をしている。パレスチナの運動も旭川から久米島まで動きがあるんです。労働者の統計のグラフを展示しているのも、僕らの活動と似ている。それを展覧会と呼んでいいなら、これからのデモは展覧会と呼んでやろうかなと思いました。

足立 グラフを美術展で展示するのは、1970年代にドイツのハンス・ハーケがやっているんですけど、実は1920年代の日本にもあった。アートと非アートの境界を行くところにスリリングなものを感じます。奥さんはこの先、政治を遂行するためにアートをやめると仰っていて、心配ではありますが、もちろんどちらでも応援しています。

(まとめ：岡村幸直)